

オンライン集団読み聞かせにおける聞き手同士の相互作用の創出 —オンライン上の他児の発話に着目して—

森本ひのき

保育所や図書館・書店といった様々な場所で複数の子どもに対して読み聞かせを行う集団読み聞かせ活動が展開されている。集団読み聞かせは、物語理解を深める効果や、楽しみを共有できる効果があることが指摘されている。これらの効果が発揮されるためには子ども同士の相互作用が必要であるともされている。このような集団読み聞かせは、新型コロナウイルス感染症拡大を契機として、オンライン上へ活動が展開されるようになった。しかし、オンライン上での活動は交流が難しく、集団読み聞かせの効果を発揮するための相互作用を創出することが困難である。そこで本研究では、オンライン集団読み聞かせにおいて、聞き手である子ども同士の相互作用を創出することを目的とする。その上で特に、相互作用を起こす要因として他児の発話に着目し、他児の発話が聞き手にどのような影響を与えるのかを明らかにするための実験を行った。

最初に、他児の音声有りのおはなし会と他児の音声無しのおはなし会の動画を作成した。これら2つの動画を子どもに視聴させ、その反応を比較した。読み聞かせに利用した絵本は、問いかけや、繰り返しの文章があり発話を誘発する「ねこいる」と「によっ!」の2冊とした。実験に参加した子どもは4人であり、それぞれの子どもが他児の音声有無の両パターンを視聴できるように動画を組み合わせた。動画は音声有無の読み聞かせの順番と絵本の順番のカウンターバランスが取れるようにした。読み聞かせ動画を視聴中の子どもの様子はビデオカメラとICレコーダーで記録した。

実験の結果、他児の発話から誘発されたとみられる子どもの発話がいくつか観測された。また、他児の発話に応答したとみられる反応も観察することができた。他児の音声有りと音声無しの比較においては、読み聞かせへの好意的な反応数には有意な差はなかったが、集中力は音声有りの方が高くなる可能性が示された。ただし、部屋に1人だけで読み聞かせを視聴することによる寂しさや緊張感がこれらの実験結果に影響を与えた可能性がある。

本研究により、他児の発話によって聞き手の子どもの発話や読み聞かせへの好意的な反応が誘発される可能性があることがわかった。また、他児の発話が集中力向上に効果がある可能性が示された。これにより、オンライン集団読み聞かせでの聞き手同士の相互作用の創出への可能性を示せたと言える。今後の課題は、サンプル数を増やし結果の信頼性を上げること、実験の実施が特殊な状況であることによる影響を排除することである。また、他の絵本でも同様の結果を得ることができるのかを検証する必要がある。その上で、他児の発話以外の要素も検討し、子ども同士の相互作用を創出する環境の実現を目指す。

(指導教員 松村敦)